
リン～咲かない花～

藍村 霞輔

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リン／咲かない花／

【Zコード】

Z2007T

【作者名】

藍村 霞輔

【あらすじ】

春。

小さな新芽が芽吹く頃。

私があなたに出会った季節。

私はあなたに恋をした

ある一つの悲しい恋の物語。

春。

小さな新芽が芽吹く頃。

私があなたに出会った季節。

私はあなたに恋をした

「素敵な音色ね」

出し抜けに声を掛けられ、私は無意識に顔を上げた。

横笛の音に誘われてきたのか、目の前には少女が一人、ちょこんと座っていた。

私は笛を置くと少女に笑顔を向け、ありがとうと言つた。

「あなた、楽師？良かつたら他の曲も聴かせて」

「いいですよ、お嬢さん」

「お嬢さんじやないわ。私はミオよ。あなたは？」

まさか名乗られるとは思わず、しかも尋ねられるとは思わなかつた私は一瞬目を丸くした。だがすぐに表情を戻し、答えを返す。

「…リン、と申します」

これが、私と彼女の“出会い”だつた。

*

「リン！また笛を聴きに来たわ」

「姫様……また無断で城を抜け出してきたんですか？この間侍女長に叱られたばかりでしょ？」

「リン。あなたこそ何回言えば分かるの？私のことば//オと呼びなさい」といつも言つてるでしょう

「一介の楽師風情が、仮にも一国の姫君を呼び捨てになど出来る訳がありません。おこがましいにも程があります」

「分かった、じゃあ命令よ。これなら問題ないわね？」

「姫様……だから、」

「一介の楽師風情が仮にも一国の王女の命令を聞けないの？」

「…………わかりました、ミオ……様」

「本当は様も要らないんだけど、まあいいわ。許してあげるミオはしたり顔で私に笑顔を見せた。

*

「ワソの笛の音って不思議。ずっと聴いていたくなるわ

*

ミオは実に奔放な少女だった。

誰彼構わず気さくに話しかけ、打ち解けるその少女に身分の高い者
特有の尊大さは微塵も無い。

普通王族とは城から殆ど出ないものだが、ミオはとくと守衛の目
を盗んでは城下に出向き、人々との語らいを楽しんでいるという
だ。

ミオを探しに来た侍女長の言が無ければ彼女が王女だとは斯程も信
じなかつただろう。

侍女長に連れ戻された後も頻繁に私の元を訪ねてくるミオに私も、
王女なら王女らしい振る舞いをしたらどうなのかと言つた事がある。
しかしミオは平然と「これが私の王女らしい振る舞いよ?」と言つ
てのけ、近くにいた街の者も笑つて「この方には何言つても無駄だ
よ」と逆に私を諭すのだった。

ミオは私の奏でる笛の音がたいそうお気に入りのようだ。

殆ど毎日私のいる広場へやつて来てはしみじみとそう呟いた。

そして私は決まってこう返す。

「私よりも良い腕の吹き手は沢山いますよ

それは最早、日課と言つても過言ではなかつただろう。

だがその日はいつもと違い、ミオが更に言葉を返してきた。

「でも、リンの笛は特別よ。私、あなたの奏でる音が一番好き」

嬉しそうに笑うその表情は、普段のお転婆な少女の印象とは違つて

見えた。

十六歳という輝かしい時代を象徴するような、そんな笑み。

私はいたたまれず、視線だけを彼女から逸らした。

*

ある日ミオは行きたい場所があるから一緒に来てくれとせがんだ。
私は仕方なくミオの言つままついて行つた。勿論護衛の兵など一人
もいない。

城から少し離れた小高い丘、そこがミオの目的地のようだつた。

そこは街道からも外れていて人が殆ど訪れない、言わば穴場だつた。

「昔からよくここで遊んでいたの。人目にもつかないし、どんなや
んちやをしても怒られないから」

小さく舌を出してミオが言つ。

「変わらないんですね、昔から。城の方々の慌てふためく姿が目に見えるようだ」

「ふふつ。でもね、それだけじゃないの」

「？」

私が首を傾げるとミオは傍にあつた一株の花に手を寄せた。花は未だ開いておりず、蕾のままだ。

*

「昔」として出会つた人に教えてもらつたの。夏が来るといつこの丘はイキシアでいっぱいになつて綺麗なんだつて

「イキシア？」

「翡翠色の花びらの、とっても美しい花よ。初めて見た時は本当に感動した。それ以来ここは私の秘密の場所なの」

私は僅かに片眉を上げた。

「あなたでも何かを秘密にすることがあるんですね」「どういう意味よ？」

「冗談です。ここはあなたにとってとても大切な場所なんですね」

私は丘の景色に目を遣つた。

ぽつりぽつりと別の野生花が咲くばかりで、イキシアは一輪も花開

いていない。

だがじきに「こ」は美しい翡翠の花弁で埋め尽くされるのだから。

その様子を、私はもう一度見てみたいと思った。

*

「そんな大切な場所を、何故私などに？」

同じように景観に目を向けていたミオに私は当然の疑問を投げかけた。

ミオは私を見上げた後、一度視線を景色に戻し、再び私を見た。

「あなたに知つていてほしかったからよ」

「どうして？」

「あなたが好きだから」

一陣の風が駆け抜けた。

私は思いがけない言葉に表情も無く立ち廻っていた。

ミオは……物怖じすることなく、真っ直ぐに私を見据えていた。

射抜くような清冽な瞳が、私にはとても恐ろしく思えた。

「ミオ様……ご冗談を」

「冗談なんかじゃないわ」

間髪入れずに返してくるミオを、「この時ほど憎く思ったことは無かつただろうつ。

ミオは真剣な表情で私に言った。

*

「私はリンが好きよ。ずっと傍に居てほしいと思つてる」

「私はただの楽師です。あなたは王女だ。次期女王となられる方にあまりに軽率なお言葉です」

「そつかしら？恋愛結婚した王の前例はこれまでにいくらだってあるし、別におかしなことじやないわ」

「市井相手ならばまだ良いかもしませんが、私は無頼の者です。釣り合わない所の話じやない」

「私は構わないわ」

ミオは一步も退かない構えだ。

私は困つて思わず溜息を吐いた。

表向き平静を装つているものの、内心は冷や汗が止まらない。
…流されそうで。理性と感情が軋轢を起こす。
想いが、意志を潰してしまいそうになる。

続くミオの言葉が、全てを決した。

*

「…最初に会つた時から、ずっとあなたが好きだった。あなたと一緒に生きてていきたい」

「ミオ…」

「やつと、ミオって呼んでくれたわね」
嬉しそうにミオが微笑む。

私はミオを掻き抱くよにして引き寄せた。
柔らかい感触が腕の中に収まる。

「国王陛下にお会いできるだらうか。まだ『挨拶すらしていない』
勿論！明日にでも席を設けるわ」

幸せそうなミオの様子に、私も笑顔を浮かべた。

愛しいミオ。民に愛される無垢の姫君。愛すべき未来の女王。

全てが手遅れになる前に。

彼女への愛しさが本物になつてしまつ前に。
予定よりも大分早くなつてしまつけれど……

……決着を、つけねばなるまい。

*

突然恋人が出来たと言つて娘が男を連れてきては、いくら王とは言え驚愕は必至だろう。

そのまま紹介する気満々だつたミオをどうにか説得し、娘を何処の馬の骨とも知らない男に取られる父親の心境を配慮して、ひとまずミオが城下で見つけた旅の楽師として私は王に紹介されることになった。

設けられた宴席で私は腕の限りをつくし、王や臣下達に樂を披露した。

宴席は大いに盛り上がり、夜半に王が退席するまでそれは続いた。

夜の帳に包まれ城全体に静寂が下りる中、私は王の寝室を指した。足音どころか衣擦れの音すら一切立てずに歩く。気配は勿論消している。

手にはいつもの横笛ではなく、鈍く光る一振りの刃があった。

*

「動くな。騒げば殺す」

身じろぎすら許さぬといつよひに、私は横たわる王の首元に刃をぴたりと当てた。

引きつった声が王の喉から洩れる。私は表情の消えた顔で王を見下ろした。

「ここの部屋の周りの兵は一人残らず黙らせた。巡回の兵がくるまでには終わらせてやる」

「お前は、さつきの楽師か…つー？」

私は口元だけで薄く笑つた。

「楽師、か…全く、やはり覚えていなかつたか」「なに…？」

「だが私は覚えている。ここの十年、一時たりとも貴様への憎しみを忘れたことは無かつた」

「十年、だと？」

王の表情が、みるみるうちに驚愕に変わっていく。

「まさかお前、リ…」

「我が父の無念、僅かでも味わつて死ね…！」

*

無情に振り下ろした刃は王の頭蓋を割り、脳髄を引きずり出した。

真白のシーツに脳漿と鮮血が汚らしく撒き散らされる。

返り血は容赦なく私を赤く染めた。

王は喘ぐ間もなく事切れた。呆氣ない最期だった。

これで、やつと復讐は果たせた。

ずるずると刃を引き寄せ、私はベッドから離れた。

その時不意に視線を感じ、はつとして寝室の入り口に目を遣つた。

「ミオ」

そこにいたのはミオだった。

闇の中でもはつきり判る位に彼女の顔は蒼白だった。

供はない。どうやら一人で来たらしい。

「知っていたのか？私の目的を」

感づかれた気配は無かつたが、しかしそんなことは最早どうでもいい。

*

「礼を言つ。あなたのお陰で易々と城に入れた」

私は嘲笑つて言った。

ミオは身じろぎもしない。きっとこの光景が信じられないのだろう。もうあの愛しい笑顔は見られぬと思うと胸の奥が痛んだが、悔いはない。

ミオは私に何を言つだらうか。侮蔑？ 恐怖？ 嫌悪？ だが、そのどれでもなかった。

「やはり、私には止められなかつたのね」

「何？」

「知つていたわ。あなたが父に憎しみを抱いていた事、その為にこの国に戻ってきたのだろうという事も。そうでしょう？ 我が父によつて追放された伯父様の子、リインベルク」

私は目を見開いた。

「…知つていたのか」

「初恋の人を忘れたりしないわ」

ミオは弱々しく笑みを浮かべた。

*

それは十年前の春。

私はあなたに出会い、恋をした。

春、そしてあなたが教えてくれたイキシアの咲く夏が、私にとって特別な季節になつた。

「…覚えていとは思わなかつた」

「あの年の夏、あなたと伯父様は国を追われた。幼い私には解らなかつたけど、今ならあなたの気持ちが解る。だからあなたを止めたかった。あなたを救つてあげたかつた。…でも、結局全部無駄だつたわね」

あなたを見つけて声を掛けたのも、秘めていた想いを告白したのも、全て…

「私の愛では、憎しみからあなたを救うことは出来なかつたのね」
哀しげに笑う私の顔に、リンの手が触れる。

「あなたの手を振り払つたのは私だ。あなたの所為じゃない」

*

愛に応えなかつたのは。自身の愛を自ら殺したのは。

「何も、悔いることは無いんだ」

リンは笑つた。笑つたまま泣いていた。

私は、ただ静かに、リンの胸に顔を埋めた。

翌朝、国王崩御の報が城下を駆け抜けた。

同時に即位することとなつた新女王ミオが臣下に下した最初の命令は、楽師リンを極刑に処せというものだつた。

即日之内に刑は執行され、弑逆者リンは歴史から姿を消した。

いつもは城の傍の丘にいっぱいに広がるイキシアは、その年の夏、何故か一輪の花も咲かなかつた。

完

(後書き)

この小説は昔、プラウザ型オンラインゲーム「Kingdom of Chaos」の一コントンツ、大聖堂にある小説の間にて行われた企画『小説王』に応募した作品です。

企画の概要は予め提示された4つのテーマから1つ以上を選択し、それに沿った作品を1レス300文字×15レス 4500字以内で書くというものでした。

通常の4500字ならばそれほど難しいことはないのですが、何せ1レスの上限が300文字、ぴったり書くのはなかなか至難の業です。

更に場面転換や流れなどを考えると15レス全てを300文字ぴったりにするのはまず不可能なので、実際使える文字数はこれよりも少なくなる訳です。

しかしながらスレッド形式はレスの移動をそのまま場面転換に使うことができたりと、不利な点ばかりでもありませんが。

…とまあ、そういう感じでなかなか書くのに苦労した作品であります。

なにせ詰め込みすぎると収まりきらないし、かといって削りすぎると作品として破綻してしまつ…その追加減が非常に難しかったように思います。

そして投稿時にちょっとした「ゴタゴタ」があつて色々な方に迷惑を掛けてしまつたこともあります、実はあんまりいい思い出のある作品じやありません(笑)

ですが私の書いた数少ない短編小説なので、せつかくだしとほぼ原文そのままで載せてみました。

レスの移動はアスタリスクで表しています。

しかしながら3年以上前の作品な訳ですが…いや、拙い（笑）

あの頃よりは進歩していると信じたいですね。

これもいつかリメイクしてみたいですね。

因みにイキシアの花言葉は「秘めた恋」

選択したテーマは「愛」と「希望」でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2007t/>

リン～咲かない花～

2011年10月9日01時08分発行